

日本の文学

77

名 作 集(一)

中央公論社

名作集(一)

昭和45年7月5日初版発行

昭和49年2月15日5版発行

発行者 高 梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 文京紙器株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

武蔵野	山田 美妙	7
藪の鶯	三宅 花圃	21
初恋	矢崎嵯峨の舎	54
かくれんぼ	斎藤 緑雨	74
空 屋	宮崎湖処子	82
人生に相渉るとは何の謂ぞ	北村 透谷	97
滝口入道	高山 樗牛	105
書記官	川上眉山	153
今戸心中	広津柳浪	171

くれの廿八日	内田魯庵	210
初すがた	小杉天外	270
深川女房	小栗風葉	372
野菊の墓	伊藤左千夫	402
駅夫日記	白柳秀湖	436
序に代えて人生観上の 自然主義を論ず	島村抱月	473
修禪寺物語	岡本綺堂	479
初恋	森田草平	494
注解		520

解 説
年 譜

口 絵
挿 画

瀬沼茂樹

555 536

「今戸心中」

武内桂舟

「武蔵野」「藪の鷲」

尾形月耕

「初恋」

鈴木華邨

「滝口入道」

水野年方

「初すがた」

磯野義雄

「野菊の墓」

広瀬勝平

「駅夫日記」

中村不折

「作樂寺物語」

竹久夢二
義徳

名
作
集
(一)

武蔵野

山田 美妙

上

この武蔵野は時代物語ゆえ、まだ例はないが、その中の人物の言葉をば一種の体で書いた。この風の言葉は慶長ごろの俗語に足利ごろの俗語とを交ぜたものゆえ大概その時代には相応しているだろう。

ああ今の東京、昔の武蔵野。今は雖も立てられぬほどの賑わし、昔は閑も立てられぬほどの広さ。今仲の町で遊客に睨みつけられる鳥も昔は海辺四五町の漁師町でわずかに活計を立てていた。今柳橋で美人に拝まれる月も昔は「入るべき山もなし」、極の素寒貧であつた。実に今は住む百万の蒼生草、実に昔は生えていた億万の生草。北は荒川から南は玉川まで、嘘もない一面の青舞台

で、草の楽屋に虫の下方、尾花の招引につれられて寄来る客は狐か、鹿か、または兎か、野馬ばかり。このようなどころにも世の乱れとてぜひもなく、このころ軍があつたと見え、そこそこには腐れた、見るも情ない死骸が数多く散っているが、戦国の常習、それを葬ってやる和尚もなく、ただところどころにばかり、退陣の時にでも積まれたかと思える死骸の塚が出来ていて、それにはわずかに草や土やまたは敝れて血だらけになっている陣幕などが掛かっている。そのほかはすべて雨ざらしで鳥や獣に食われるのだらう、手や足がちぎれていたり、また記標に取られたか、首さえもないのが多い。本当にこれらの人々にもなつかしい親もあろう、可愛らしい妻子もあろう、親しい交わりの友もあろう、身を任せた主君もあろう、それであつてこのありさま、刃の串につんざかれ、矢玉の雨に碎かれて異域の鬼となつてしまつた口惜しさはどれほどだろうか。死んでも誰にも祭られず……故郷では影膳をすえて待つてゐる人もあろうに……「ふる郷に今宵ばかりの命とも知らでや人のわれをまつらむ」……露の底の松虫もろとも空しく怨みに咽んでゐる。それならそれが生きていた内は榮華をしてゐたか。なかなかそうばかりでもない世が戦国だものを。武士は例外だが。ただの百姓や商人など鋤鋤や帳面のほかはあまり手に取つたこともないものが「サア軍だ」と駆り集

められては親兄弟には涙の水杯で暇乞い。「しかたがない。これ、悴。死人の首でも取ってごまかして功名しろ」と腰に弓を張る親父が水鼻を垂らして軍略を皆伝すれば、「あぶなかつたら人の後に隠れてなるだけ早く逃げるがいいよ」と兜の緒を緊めてくれる母親が涙を噛み交せて忠告する。ても耳の底に残るように懐かしい声、目の奥に止まるほどに昵しい顔をば「さようならば」の一言で聞き捨て、見捨て、さて陣鉦や太鼓に急ぎ立てられて修羅の街へ出かければ、山奥の青苔が褥となったり、河岸の小砂利が襖となったり、その内に……敵が……それから、太鼓が……右左に大将の下知が……そこで命がなくなつて、跡は野原でこのありさまだ。死ぬ時にはさぞ腕いたろう、さぞ死ぬまいと齒をくいしばつたろう。血は流れて草の色を変えている。魂もまた身体から居どころを変えている。切り裂かれた疵口からは怨めしそくに臓腑が這い出して、その上には敵の余類か、金づくり、薄金の鎧をつけた蠅將軍が陣取っている。はや乾いた眼の玉の池の中には蛆大將が勢揃え。勢いよく吹くのは野分の横風……変則の匂い囊……血腥い。

はや下駄だろ、日は函根の山の端に近寄つて儀式どおり茜色の光線を吐き始めると末野はすこしずつ薄樺の隈を加えて、遠山も、毒でも飲んだかんだんと紫になり、原の果てには夕暮の蒸発気がしきりに逃水をこし

らえている。ころは秋。そここわがままに生えていた木もすでに緑の上衣を剥がれて、寒いか、風に裸でいると、旅帰りの椋鳥は慰め顔にも澄ましきつて囀っている。ところへ大層急ぎ足で西の方から歩行て来るのはわずか二人の武者で、いずれも旅行の体だ。

一人は五十前後だろ、鬼髯が徒党を組んで左右へ立ち別かれ、眼の玉が金壺の内ぐるわに櫛籠り、眉が八文字に陣を取り、唇が太土堤を厚く築いた体、それに身長が櫓の真似して、筋骨が暴馬から利足を取っているあんばい、どうしても時世に恰好の人物、自然淘汰の網の目をば第一に脱けて生き残る逸物と見えた。その打扮はどんなだか。身に着いたのは浅紺に濃茶の入った具足で威もよほど古びて見えるが、ところどころに残っている血の痕が持主の軍馴れたのを証拠立てている。兜はなくして乱髪が薬で括られ、大刀疵がいくらかもある臘色の業物が腰へ反り返っている。手甲は見馴れぬ手甲だが、実は濃菊が剝がれているのだ。この体で考えればどうしてもこの男は軍事に馴れた人に違いない。

今一人は十八九の若武者と見えたけれど、鋼鉄の厚兜が大概顔を匿しているの十分にはわからない。しかし色の浅黒いのと口に力身のあるところでさつと推して見ればこれもきつとした面体の者と思われる。身長はひどく大きくもないのに、具足が非常な太胴ゆえ、何となく

身の横幅が釣合^{つあ}いわるく太く見える。具足の威は濃藍^{おどしこいあい}で、魚目^{ぎょめ}はいかにも堅そうだし、そして胴の上縁^{たねのうへえり}は離れ山路^{はなれさんろ}であッさり囲まれ、その中には根笹^{ねざさ}のくずしが打たれてある。腰の物は大小ともになかなか見事な製作で、鐙^{てう}には、誰の作か、活き活きとした蜂^{はち}が二疋ほど毛彫りになっている。古いながら具足も大刀もこのとおり上等なところで見るとこの人も雑兵^{ぞうへい}ではないだろう。

このごろのならいとてこの二人が歩行く内にもあたりへ心を配る様子はなかなか泰平の世に生まれた人に想像されないほどであって、茅萱^{ちがや}の音や狐の声に耳を側^{そば}たてるのは愚かなこと。すこしでも人が踏んだような痕^{あと}の見える草の間などをば軽々しく歩行^{ある}かない。生きた兎が飛び出せば伏勢^{ふくせい}でもあるかと刀に手が掛かり、死んだ兎が途^{みち}にあれば敵の謀計^{はかりごと}でもあるかと腕^{うで}がとりしぼられる。そのころはまだ純粹^{ひんじう}の武蔵野で、奥州街道はわずかに隅田川^{うみだがわ}の辺を沿うてあつたので、なかなか通常の者でたたいまの九段あたりの内地へ足を踏み込んだ人はなかったが、そのすこし前の戦争の時にはこの高処^{たかみ}へも陣が張られたと見えて、今この二人がその辺へ来かかつて見回すときぎれた幕や兵糧^{ひやうりやう}の包みが死骸とともに遠近^{あちこち}に飛び散っている。この体に旅人も首を傾けて見ていたが、やがて年を取った方がしずかに幕を取り上げて紋どころをよく見るとこれは実に間違^{まちが}いなく足利^{あしかが}の物なので思わずも

雀躍^{こおどり}した。

「見なされ。これは足利の定紋じゃ。はて心地よいわ」と言われて若いのもうなずいて、

「そうじゃ。むごいありさまでおじゃるわ。あの先年の大合戦の跡でおじゃろうが、跡を取り収める人もなくて……」

「女々しいこと。何でおじゃる。思い出しても二方^{ふたはた}（新田義宗と義興）の御手並み、さぞな高氏^{たかうじ}づらも身戦^{みいくさ}いをしたろうぞ。あの石浜で追い詰められた時という見苦しくあつてじゃ」

「ほほ御主^{おのし}、その時の軍^{いくさ}に出なされたか。耳よりな……語りなされよ」

「かたり申そうぞ。ただし物語に紛れて遅れては面目なからう。翌日^{あす}ごろはいずれも決めて鎌倉へいでもしなさるうに……後^{おく}れては……」

「それもそうじゃ。そうでおじゃる。さらば物語は後になされよ。とにかくこの敗軍の体を見ればいとど心も引き立つわ」

「引き立つわ、引き立つわ、糸のように引き立つわ。和主^{わぬし}もこれから見参して毎度手柄をあらわしなされよ」

「これからはまた新田の力で宮方も勢いを増すでおじゃる。楠^{くす}や北畠^{きたはたけ}が絶えたは惜しいが、また二方が世に秀^{すけ}れておじゃるから……」

「嬉しいぞや。早う高氏づらの首を斬りかけて世を元弘の昔に復したや」

「それは言わんでものこと。いかばかりぞその時の嬉しさは」

これでわかったこの二人は新田方だと。そして先年尊氏が石浜へ追ひ詰められたとも言ひ、また今日は早く鎌倉へこれら二人が向つて行くと云うので見ると、二人とも間違ひなく新田義興の隊の者だろう。応答の内にはいづれも武者氣質の凛々しいところが見えていたが、比べ合せて見るとどうしても若いのは年を取ったのよりまだ軍にも馴れないので血腥気が薄いようだ。

それから二人は今の牛ヶ淵あたりから半蔵の壕あたりを南に向つて歩いて行つたが、そのころはまだ、この辺は一面の高台で、はるかに野原を見通せるところから二人の話も大抵四方の景色から起つてゐる。年を取つた武者は北東に見えるかたそぎを指さして若いのに向ひ、

「誠に広いではおじゃらぬか。いづくを見ても原ばかりじゃ。和主などはまだ知りなざるまいが、それあすこのかたそぎ、のうあれが名に聞ゆる明神じゃ。その、また北東には浜成たちの観世音があるが、ここからは草で見えぬわ」

「浮評に聞える御社はあのことでおじゃるか。見れば太う小さなものじゃ」

「あの傍じゃ、おれが、誰やらん逞ましき、敵の大將の手に衝き入つて騎馬を三人打ち取つたのは。その大將め、はるか對方に栗毛の逸物に騎つてひかえてあつたが、おれの働きを心にくく思いつらう、『あの武士、打ち取れ』と金切声立てておつた」

「はははは、さぞ御感に入りなされたらう、軍が終つて。身に疵をば負いなされたか」

「四カ所負いたがいずれも薄手であつた。とてもあのやうな乱軍の中では無疵であらう者はおじゃらぬ。もちろん原で戦うのじゃから、敵も味方もその時は大抵騎馬であつた。が味方の手綱には大殿（義貞）が仰せられたまま金鏈が縫い込まれてあつたので手綱を敵に切り離される掛念はなかつた。その時の二の大將（義興）の打扱は目覚ましい物でおじゃつたぞ」

「一の大將（義宗）もおじゃつたらう」

「おじゃつた。この方もおなじやうな打扱ではおじゃつたが、具足の威がちと濃かつたゆえ、二の大將ほど目立ちなさらなかつた」

折から草木を烈しく揺つて野分の風が吹いて来た。野原の急な風……それはなかなか想像のはかで、見る間に草の茎や木の小枝が砂と一途にさながら鳥の飛ぶように幾万となく飛び立つた。そこで話もたちまち途切れた。途切れたか、途切れなかつたか、風の音に吞まれて、わ



からないが、まずは確かに途切れたらしい。この間の応答のありさまについてまたつらつら考えれば年を取った方はなかなか経験に誇る体があつて、若いのはすこし謹慎深いように見えた。そうでしょう、読者諸君。

その内に日は名残りなくほとんど暮れかかつて来て雲の色も薄暗く、野末もだんだんと霞んでしまうころ、変な雲が富士の裾へ腰を掛けて来た。原の広さ、天の大きさ、風の強さ、草の高さ、いずれも恐ろしいほどに苛めしくて、人家はどこかすこしも見えず、時々をはるか對方の方を馳せて行く馬の影がちらつくばかり、夕暮の淋しさはだんだんと脳を噛んで来る。「宿るところもおじやらぬのう」「今宵は野宿するばかりじゃ」「急ごうぞ」「急ぎやれ」これだけの応答が幾たびも試験を受けた。

「馬が走るわ。捕えて騎ろうわ。和主は好みなさるか」

「それ面白や。騎ろうぞや。すわやこなたへ近づくよ」二人は馬に騎ろうと思つて、近づく群をよく祝ればこれは野馬の簇ではなくて、大変だ、敵、足利の騎馬武者だ。

「はッし、ぬかった、気がつかなかった。馬じゃ……敵じゃ……敵の馬じゃ」「敵は多勢じゃ、世良田どの」「味方は無勢じゃ、秩父どの」「さても……」「思わぬ……」

着物は葛だが柿染めの古ぼけたので、どうしたのか砥粉に塗れている。顔形、それは老若の違いこそはあるが、ほとほと前の婦人と瓜二つで……ちと軽卒な判断だが、だからこの二人は多分母子だろう。

二人とも何やら浮かぬ顔色で今までの談話が途切れたような体であつたが、しばらくして老女はきッと思ついた体で傍の匕首を手に取り上げ、

「忍藻、和女の物思いも道理じゃが……この母とていう心にはかかるが……さりとて、こやそのように、忍藻太息吐くようでは、太息のみ吐いておるようでは武士……実よ、世良田三郎の刀禰の内君には……聞けよ、この母の言葉を。見よ、この母の衣を。和女はよも忘れはせまい、和女には実の親、おれには実の夫のあの民部の刀禰がこたび二の君の軍に加わつて、あッばれ世を元弘の昔に復す忠義の中に入ろうとて、世良田の刀禰もろとも門出した時、おれは、こや忍藻、おれは何して何言うたぞ。おれが手ずから本磨ぎに磨ぎ上げた南部鉄の矢の根を五十筋、おのおのへ二十五筋、のう門出の祝いと差し出して、忍藻聞けよ——『二方の中のどなたでも前櫓で敵を引き受けなさるならこの矢の根に鼻油引いて、兜の金具の目ぼしいを附けおるを打ち止めなされよ。また殿で敵に向いなさるなら、鹿毛か、草毛か、月毛か、栗毛か、馬の太く逞しきに騎つた大将を打ち取りなされ

よ。婦人の甲斐なさ、それよ忠義の志ばかりでおじやるわ』とこの眼から張り切りようずる涙を押えて……おはおれは今泣いてはいぬぞ、忍藻……おれも武士の妻あたに夫を励まし、鐐を急いたぞ。そを和女、忍藻も見ておじやつたろうぞのう。武士の妻のこころばえはかほどのうてはならぬわ。さればこそ今日までも休まず、夫と鐐とは家にはおらぬが、おれが矢の根を日々磨ぎ澄まして、おなじ忠義の刀禰たちに与うるのじや。こう衣は砥粉に塗れてもなかなかにうれしいぞい、さすれば」

「まことよ。仰せは道理におじやる。妾とてなど……」

「心からさならこの母もうれしいわ。見よ、のう、この匕首を。門出の時、世良田の刀禰が和女にこを残して再会の記念となされたりよ。それを見たらよしなない、女らしい心は、刀禰に対して出されまい。和女とて一わたりは武芸をも習うたのに、近くは伊賀局などを亀鑑となされよ。人の噂にはいろいろの詐偽もまじわるものじや。軽々しく信ければ後に悔ゆることもあろうぞ」

言いきつて母は返辞を待兒に忍藻の顔を見つめるので忍藻も仕方なさそうに、挨拶したが、それもわずかに一言だ。

「さもそうず」

母もおぼつかない挨拶だと思ふような顔つきをして、いたがさすがになお強いてとも言いかね、やがてやや傾い

た月を見て、

「夜も更けた。さらばおれはこれから看経しようぞ。和女は思いのまにまに寝ねよ」

忍藻がうなずいて礼をしたので母もそれから座を立つて縁側伝いに奥の間へようよう行つた。跡に忍藻はただ一人起つて行く母の後影を眺めていたが、しばらくして、こらえこらえた溜息の堰が一度に切れた。

話の間だがちょっとここで忍藻の性質や身の上がやや詳細に述べられなくてはならない。実に忍藻はこの老女の実子で、父親は秩父民部として前回武蔵野を旅行していた旅人の中の年を取った方だ。そして旅人の若い方はすなわち世良田三郎で、母親の話でも大抵わかるが、忍藻にはすなわち夫だ。

この三郎の父親は新田義貞の馬の口取りで藤島の合戦の時主君とともに戦死をしてしまい、跡にはその時二歳になる孤子の三郎が残っていたので民部もそれを見て不憫に思い、引き取って育てる内に二年の後忍藻が生まれた。ところが三郎は成長するに従って武術にも長けて来て、なかなか見どころのある若者となったので養父母も大きに悦び、そこでそれをついに娘の嫁にした。

その時三郎は十九で忍藻は十七であつた。今から見ればあまりな早婚だけれど、昔はそのようなことにはすこしも構わなかつた。

それで若夫婦は仲よく暮していたところが、ふと聞けば新田義興が足利から呼ばれて鎌倉へ入るとの噂があるので血氣盛りの三郎は家へ引き籠もつて軍の話を素聞きにしていられず、舅の民部も南朝へは心を傾けていることゆえ、難なく相談が整つてそれから二人は一途に義興の手に加わろうとて出立し、ついに武蔵野で不思議な危難に遇つたのだ。その危難にあつたことが精密ではないが、薄々は忍藻にも聞えたので、さアそれが忍藻の心配の種になり、母親をつかまえて鬱ぎ出すのでそこで前のとおり母親もそれを論じて励ましていた。

「門前の小僧は習わぬ経を誦む」鍛冶屋の嫁は次第に鉄の産地を知る。三郎が武術に骨を折るありさまを朝夕見ているのみか、乱世の常として大抵の者が武芸を収める常習になつていたので忍藻も自然太刀や薙刀のことに手を出して来ると、従つて挙動も幾分か雄々しくなつた。手首の太いのや眼光のするどいのは全くそのためだろう。けれど今あからさまにその性質を言おうなら、なるほど忍藻はかなり武芸に達して、一度などは死にかかつている熊を生捕りにしたとて毎度自慢が出たから、心も十分猛々しいかと言うに全くそうでもない。その雄々しく見えるところはただ時々身の身の挙動と言葉のありさまにあつたばかりで、その婦人に固有の性質は（ことに心の教育のない婦人に固有の性質は）跡を絶つてはいない。た